

開催地名	大阪府大阪市
開催日時	令和7年11月18日(火) 9:45 ~ 10:30
開催場所	大阪市立東三国小学校 講堂
語り部	吉田 亮一(宮城県仙台市)
参加者	大阪市立東三国小学校児童 30名
開催経緯	本市の東三国市では、防災・減災について学習しているが、まだまだ足りないと感じていたところ、消防庁の防災意識向上プロジェクトを知り、実際に被災経験や避難経験を直接聞き、考える機会を設けたいと6年生を対象に防災教室を実施した。
内容	<p>(1)これまでの地震の経験について</p> <p>これまでに5回の大きな地震を経験してきた。最初は48年前の宮城沖地震。その後も岩手・宮城内陸地震のような直下型の地震、そして東日本大震災の一年前に仙台で震度5強があり、翌年2011年3月11日に東日本大震災が起きた。記録には残っていないが「震度7」程度で、立ってられないレベルである。</p> <p>東日本大震災では犠牲者が約1万5900人、そして行方不明者が約2,500人。震災より11年の月日が経ち、つい最近小学生の女の子が見つかった。</p> <p>(2)災害に対する「危機感」を持つということ</p> <p>自然災害には、竜巻・豪雨・豪雪・津波・火山噴火があり、最近は熊の出没も深刻である。熊が多いため学校が休校になり、リモート授業や保護者の送迎が必要になる地域もある。災害にはそれぞれ発生の仕組みがあるが、その共通点は「いつ起こるかわからない」ということ。そのため地震速報や豪雨・豪雪・津波など、さまざまな注意情報が出されている。</p> <p>地球温暖化の影響もあるが、私は地球そのものが“生きている”からこそ災害が起き、人類も長い歴史の中でそれを乗り越えてきたのだと考える。大きな災害があっても生き延びてきた理由は、人間を含む生き物が危機感を持ち、考えて行動してきたからである。防災には自助・共助・公助があるが、その前提として最も大切なのは「危機感を持つこと」。大雨や地震、津波が来たときどうするかを日頃から考えておくことが重要である。</p> <p>(3)地震発生時の行動や備え</p> <p>お弁当や食品の容器は、洗って乾かせば災害時に皿として再利用できる。断水時はラップを敷いて使えば洗う必要がなく便利である。経験がないとこうした</p>

方法を知らないため、体験者の話を知ることが重要。日頃から容器を洗って保管しておくことで災害時に役立つ。

また、室内の安全確保も大切である。家具は重いものを下、軽いものを上に置き、割れ物も同様に配置します。タンスが倒れる方向によっては寝ている人を直撃する危険があり、自分の寝る位置が安全か確かめておく必要がある。避難経路となる通路に物を置かないこと、ショーケースなどが倒れて通路を塞がないよう工夫することも重要である。

地震ではブロック塀や屋根瓦が落下して危険な通学路に変わることがあります。

また、道路が深く陥没したり、電柱や看板が倒れたりする可能性もある。普段安全と思っている場所が、災害時には危険に変わることが理解しておく必要がある。身を守るためには、頭を守る工夫が大切。ランドセルを頭に掛けても支えきれない場合があるため、手持ちのバッグなどを使って頭や首を守り、体育すわりのように姿勢を低く保つことが効果的である。

寝ているときの地震では、机の下に正しく隠れることが重要。学校の机には安全に隠れられるタイプと、危険なタイプがあります。4点で支える机は、平行に持つと重心が2点に集中して倒れやすくなるため、斜めの対角線を上から押さえると安定する。また下を向く姿勢は危険なので、周りをみわたすこと。

夜間の地震に備え、避難用持ち出し袋よりも先に使うものとして、『靴下・スニーカー・懐中電灯・ヘッドライト・防寒用のフード付き雨具』など「防災用品6点セット」をリュックに入れ、枕元に準備しておく。停電時は部屋に物が散乱している可能性が高く、ブレーカーを上げるためにキッチンや玄関まで歩く必要があるため、足を守ることが大切。スニーカーを履き、ライトを照らすことで安全を確保すること。

私の祖母は関東大震災などを経験し、寝るときに風呂敷に洋服を包んで枕元に置く習慣がありました。「災害があったらそれを背負って逃げなさい」と言われ、幼い頃から防災への意識付けがあった。

(4) 避難生活では地域が一体となって支え合う

東日本大震災の際には、小学生・中学生・高校生、地域の大人が協力し避難生活を支えた。避難開始直後の公園ではテントやブルーシートで寒さをしのぎ、3年生の女の子が家から公園に避難して助かった例もあった。中学生は避難所の準備、小学生はゴミ分別や掲示板づくり、高校生は水運びなどを担当し、地域の被災者同士が助け合った。マスク着用などの感染症対策も早くから行われていた。

また、マンションではエレベーターが使えなくなるため、高校生・大学生が重いポリタンクを抱えて階段で高層階まで運ぶなど、地域全体で支援し合いながら避難生活を続けた。

避難所を体験したことがない人が多いと思うが、避難所では多くの役割が必要で、事前に担当を決めることはできない。その場にいる人たちで協力し、在宅避難の人も自宅から応援に来てくれることがある。私たちの地域でも、半分以上が自宅から手伝いに来てくれた。被災者同士が助け合うことこそが、避難所運営の基本で、3.11では小学生から高齢者まで地域が一体となり支え合っていた。

また、津波の想定について少しお話すると、ハザードマップの「5m」「10m」「20m」という数値は水面の高さであり、その上には車、建物、コンテナ、船などの瓦礫が大量に浮上して流れてくる。つまり、水面より高い場所においても安全とは限らず、瓦礫によって命を落とすことが多いということ。実際、津波による多くの犠牲者は溺死ではなく瓦礫による致命傷でした。柱が体に刺さることや、火がついた瓦礫が流れてくる場合もあるため、「想定より高い場所にいるから安心」という考えは禁物。状況をよく理解し、正しい避難行動をとることが大切である。

(5)さいごに

こうして全国を回って自身の経験をお話するのは、災害時に自分の命を自分で守ってほしいから。災害が起きる時間によっては、家族がお仕事で家におらず、すぐに戻れないこともある。戻れても再び職場に行かなくてはならない場合もある。先生たちにも家庭があり、状況によっては学校に来られない、あるいは家を離れて学校に来なければならないこともある。

このように、大人が必ず助けに来られるとは限らない。その時に動けるのは、君たち自身。小学生、中学生、高校生も大きな力になる。だからこそ自分たちが支え合う存在になれることを覚えておいてほしいと思う。

	
開催地より	<p>この防災教室を通じて、災害が起きた時、周りに頼りになる人がいなくても自分の命を守ること、各自が動くことがすごい力になるという事を学ぶことができた。今後の防災・減災学習に活かしていきたい。</p>